



花巻地域の中世城館跡の紹介

奥州藤原氏が源頼朝に滅ぼされてから豊臣秀吉の天下統一までのおよそ400年間、花巻地域は、稗貫氏と和賀氏（一部）が支配していました。いわゆる戦国時代には領内に多くの城館が築かれ、守りを強めていました。

その主な城館は右の図の通りで、ここに書かれていない城館もたくさんあります。もともと城は要塞として山などに、館は生活や政務の場として平地に築かれていましたが、時代とともに同じような機能を持つようになり、区別が難しくなりました。

この中には「小瀬川館」のように館の手がかりが現代も残っていて、当時の様子が想起できる城館もあります。

教科書の歴史学習の後、「全国の歴史は花巻とも繋がっている」ことを知るために各学校区の城館の場所や全国との関わりを調べてみることは、子どもたちの歴史への興味を深める一歩になるかもしれません。

「豊臣秀吉の全国統一と花巻」の出前授業では、各学校区の城館についてもふれます。見学の場合でも学校区の城館をスライドで学習することが可能です。出前授業や見学の実施について、検討をお願いします。

※学校区によっては、城館が少ないところや、痕跡が全く残っていないところがあります。各学校区の城館跡は年度内に紹介する予定ですが、早急に確認したい場合は、博物館の博学連携担当に問い合わせてください。



小瀬川館航空写真（東より）



博物館 臨時休館期間のお知らせ（再掲）

当館では、館内の資料整理のために右の期間は休館となります。

臨時休館
の期間

11月24日(火)～12月4日(金)

2学期後半に見学または出前授業を予定(検討)している場合は、この期間を外して依頼申請をしていただきますようお願いいたします。

前号でもお知らせした内容です。再掲しますのでご確認ください。

裏面に続く

特別展 大正イマジュリィの世界

9/12 土～
11/23 月 祝

多彩な大衆文化が隆盛した大正から昭和初期にかけて、日本では印刷技術の革新を背景に出版文化が発展しました。藤島武二、竹久夢二ら当時新しい表現方法を模索していた画家たちも、同時代の美術界の動向と並行しながら、独自の表現を生み出し、人々の心をとらえました。やがて杉浦非水をはじめとするグラフィックデザイナーが誕生し、モダンデザインに大きな影響を及ぼしました。



竹久夢二『唯我心悩ぞ知らめ』
(セノオ楽譜二七番)セノオ音楽出版社

本展では、
この頃に登場
した書籍の装

幀や挿画、ポスター、絵はがきなど大衆的な複製図像を、
イメージ図像を意味するフランス語「imagerie (イマジュリィ)」
と総称して紹介します。

当時の人々を魅了し、日常に美を
添えてきたイマジュリィは、現代の
デザインやイラストレーションの原
点といえます。モダンでユニーク、
おしゃれでかわいい、魅力的な大正

イマジュリィの世界をお楽しみください。

第1部 大正イマジュリィの芸術家たち

大正時代の美術界に大きな影響を与えたことで知られる雑誌『白樺』は、明治43(1910)年に創刊され、その後全 160 冊が刊行された文芸誌ですが、美術雑誌としての要素も強く持ち、創刊以来、西洋美術の紹介と啓蒙に心血を注ぎました。

明治から大正に移り変わる 1910 年代、若者たちには父の世代(明治の表象)への強い反発があり、芸術的混乱はそれを受けてすさまじいエネルギーとなって新たな「表現」を模索します。『白樺』はまさにその象徴だったのです。ここに取り上げられた作家たちは、そうした芸術的混乱の時代に、新しい「表現」を模索した芸術家だといえます。

藤島武二、杉浦非水、
橋口五葉、坂本繁二郎、
竹久夢二、富本憲吉、
高島華宵、広川松五郎、
岸田劉生、橋小夢、
古賀春江、小林かいち、
落谷虹児



小林かいち『二号街の女』
(絵はがきセット:部分)

関連イベント

- 記念講演会「大正イマジュリィの魅力」
講 師: 永山多貴子氏(郡山市立美術館 館長)
日 時: R8.9.27(日) 13:30～15:00
定 員: 30 名(要申込・聴講無料)
- ワークショップ「成島和紙の飾り紙箱づくり」
講 師: 赤津有美氏(和しごらボラトリー 百花)
日 時: R8.11.7(土) 13:30～15:00
定 員: 20 名(要申込)
参加費: 1,000 円

※会場は花巻市博物館講座体験学習室。
※各参加申込は、博物館ホームページの専用申し込み
フォームまたはお電話にてお申込みください。
※各参加申込期間は、開催日 1 か月前～前日まで。

第2部 さまざまな意匠(イマジュリィ)

フランスの哲学者、アンリ・ベルクソンが提唱した「エラン・ヴィタル (élan vital)」の考えは、大正イマジュリィのあらゆる表現の出発点となったといえます。エラン・ヴィタルは「生の跳躍」「生の飛翔」と様々に訳されますが、大正時代での用いられ方は、生きることに関わる何かしらの衝動というものでした。

本章で紹介する様々な意匠は、多かれ少なかれ 生の衝動から導かれているといえるでしょう。洩刺たる性欲から淫靡でデカダンな性格まで、「生」は様々に形を変えて発表されたものでした。